

# 写真投影法を用いたオンライン授業の実践

法政大学キャリアデザイン学部教授 田澤 実

## 1 はじめに

### (1) 本稿の目的

2020年度における大学の授業は、予期せぬ形でオンライン授業の実施を迫られた。大学における授業実践の多くは対面授業を前提としていたと思われるが、今後は、既存の授業実践をどのようにしてオンライン授業に導入したのか、そのプロセスを集約していく必要がある。

本稿では、オンライン授業で実施した写真投影法を用いた授業実践について報告する。上記の問題意識もあり、本稿では、特にオンライン授業に伴って変更した手続き等に焦点を当てながら報告することにする。

### (2) 大学等におけるオンライン授業

文部科学省が実施した「大学等における後期の授業の実施方針等に関する調査」によれば、2020年7月1日時点において、全面遠隔で授業を実施していた大学・高等専門学校（以下「大学等」と表記）は23.8%（254校）であり、対面と遠隔を併用していた大学等は、60.1%（642校）であった。同調査によれば、2020年度の前期は、8割以上の大学等において遠隔授業が実施されていたことになる。

遠隔授業には様々な種類があるが、スライド資料など授業教材を配信する「資料配信型」、動画や録音付の授業教材を配信する「オンデマンド配信型」、Zoomなどを用いてWeb上でリアルタイ

ム配信される講義や双方向での質疑応答などを行う「リアルタイム配信型」という区別の仕方がある。

本稿におけるオンライン授業は、Zoomを用いて「リアルタイム配信型」で行ったものである。

### (3) 本稿の構成

つづく第2節では、写真投影法について概観し、第3節では、筆者が今までに対面授業で実施してきた写真投影法を用いた教育実践の概要を紹介する。第4節では、オンライン授業時の写真投影法を用いた教育実践について、対面授業時の手続きと比較しながら述べる。第5節はまとめである。

## 2 写真投影法の概要

### (1) 写真投影法

わが国において、写真投影法という言葉を最初に用いたのは野田（1988）である。野田（1988）は、子どもに2本のフィルムを渡し、「一日の生活と好きなモノ」というテーマで写真撮影を依頼した。そして、子どもには、一日にしたこと、およびそれについて感じたことなどの行動記録が求められた。野田（1988）は、この方法が、子どもたちの視野から環境を見ることに有効であると考え、個人と社会の中間の世界を垣間みるこの方法を写真投影法と名付けた。このように写真投影法には、人々から見た環境（外界）をとらえる側面と、人々の心理的世界をとらえる側面の二つが

含まれている（都筑，2005）。

## (2) 写真投影法を用いた教育実践

このような特徴を活かし、写真投影法は教育実践にも応用されている。そのような実践（e.g. 高野，2000；北川，2004；田澤，2010，2017）においては、対象者が写真を撮影した後に、発表や他者との話し合いを通して、写真を撮影する過程では十分に自覚されていなかったことに気がついていくことが示されている。

教育実践において、言語のみに頼る方法では、対象者が何を書いているのか分からない、または、何を話しているのか分からないケースもあるであろう。それに対して、質的研究の分野では、視覚データの活用が進んでおり、写真はそのひとつとしてあげられる。写真は、対象者から発言を引き出すきっかけとして用いることができる。

## (3) 写真投影法における過去に撮影された写真の扱い

写真投影法が、対象者自身による写真撮影に焦点を当てているのに対して、大石（2010）は、新しく撮影する写真と、過去に撮影された写真の両方を活用する方法を考案しており、この方法を「持ち寄り写真投影法」と命名している。大石（2012）は、過去に撮影された写真を含める理由として、「過去の出来事に対する現時点での解釈も含めて、現時点での自己発見・自己表現を目的としているため（大石，2012 p23）」と説明している。

なお、Flick（1995）によれば、写真を用いた研究には以下の4つのタイプがある。

- 1) 調査者が、対象者に写真を見せて、それに関して質問するタイプ
- 2) 対象者をモデルとして、調査者が写真を撮るタイプ
- 3) 調査者が対象者に、ある主題や時期に関する写真を見せてくれるように頼むタイプ
- 4) 対象者が写真を撮っている間に、調査者がその様子を観察し、被写体の選択について分析

するタイプ

写真投影法と持ち寄り写真投影法の相違点は、第3のタイプと関連することである。前者は、調査者がある主題に関する写真を対象者に撮影してもらって、その写真を見せてくれるように頼んでいる。後者は、過去に撮影された写真が追加される。

また、写真投影法と持ち寄り写真投影法の共通点は、第4のタイプと関連することである。両者ともに対象者が写真を撮っている間に、調査者がその様子を観察することはしない。しかし、被写体の選択について分析している点が共通している。

上記より、写真投影法と持ち寄り写真投影法の相違点に着目するならば、過去に撮影された写真の扱いが議論のポイントとなりうる。

## 3 写真投影法を用いた教育実践の概要

本節では、筆者が今までに対面授業で実施してきた写真投影法を用いた教育実践の概要を紹介する。

### (1) 写真投影法を用いた自己理解教育の試み

田澤（2010）は、最終学年の福祉系専門学校生を対象にした通年科目の授業において、写真投影法を用いた自己理解教育の実践を試みた。そして、その実践が自らの進路選択に与えた影響について主観的評価を尋ねた。

まず、4月には、「あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮って下さい（例えば、自分の大切にしているものや好きだと思うものを撮って下さい）。必ず自分自身で撮影して下さい。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。一日に何枚撮っても構いません。同じものを何枚撮っても構いません。撮った写真の中からいくつかを選んでもらい、後ほど授業でなぜその写真が好きなのか解説していただきます。」と教示し、対象者に27枚撮りのインスタントカメラを手渡して写真の撮影を依頼し

た。その後、筆者がカメラを回収し、写真の現像とCD-R プリントを業者に依頼した。授業においては、対象者は発表に用いる写真番号を指定し、筆者が該当する写真をCD-Rから抜き出し、プロジェクターを通してスクリーンに投影した。対象者には1人5分で自分が選んだ写真が何であるのか、そして、なぜその対象が好きなのかなどについてプレゼンテーションを求めた。残りの聞き手は、そのプレゼンテーションを見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなどのコメントを、コメント・ペーパーに記入するように求めた。発表者は授業後にそれらのコメント・ペーパーを受け取り、翌週にコメント・リプライ・ペーパーを提出した。

そして、1月には「あなたは、前期の授業で行った写真課題（好きな写真を撮ってきてそれを発表する授業）は、自分の進路選択行動に役立ったと思いますか？」という教示で尋ね、「はい」または「いいえ」で回答を求めた。また、その理由についても自由記述で回答を求めた。その結果、進路選択に役立ったと認識した理由に、「自分の見つけなおし」および「好きなものの認識・志向」に該当する記述が見られたことから、写真投影法が進路選択に向けた自己理解の深化に役立ったことがうかがえた。一方で、進路選択に役立たなかったと認識した理由に、「既知」および「進路先と無関連」に該当する記述が見られたことから、すでに自分の希望進路が明確となっている者には、写真投影法が自己理解として何か新たな発見を促すようなものではないこと、また、写真撮影をする際の教示には、自分らしいと思うものだけではなく、自分の将来とのつながりを意識させるような教示が必要になるという課題が残されていることがうかがえた。

以上より、田澤（2010）は、写真投影法は自己理解や進路選択に関して、いくつかの今後の課題を残したものの、一定程度の効果をもたらしたと結論づけた。

## (2) 写真投影法を活用した時間的展望の実態把握と働きかけ

田澤（2017）は、大学1年生を対象にした授業において、写真投影法を活用した時間的展望の実態把握と働きかけをした実践事例を紹介した。時間的展望とは「ある与えられたときに存在する個人の心理学的未来および心理学的過去の見解の総体（レヴィン、2017 p77）」と定義された心理学的概念である<sup>1)</sup>。

田澤（2017）は4月と7月に写真投影法を用いた教育実践を行った。4月には、学生に自らの過去・現在・未来をあらわすような写真の撮影を依頼し、これらの写真を用いて自己紹介をするように求めた。7月には、これらの写真のスライドを筆者が一枚一枚カード形式にして手渡した。カード一枚はA4の用紙の8分の1のサイズであった。その際には、図1に示すような用紙を配布し、横軸は時系列順に、縦軸は重要度の高い順にカードの配置を求めた。その際に、特に関連があると思われるカードは可能な限り近づけて配置するように求めた。個人で配置を終えた後は、二人一組で発表し合うように指示した。その合間に、筆者は各対象者にそのカードの配置について説明を求めた。2枚の写真が接触している状態を「つながりあり」、離れている状態を「つながりなし」と判断し、各時制のつながりの有無に注目して結果をまとめたところ、「過去、現在、未来の間につながりなし」に該当する学生が52.1%と最も多かったことを見出した。学生による配置の例を図2に示す。未来の写真（就職を示すスーツ；図の右側中央）が現在の写真とも未来の他の写真ともつながっていないことが分かる。筆者は、現在と未来の間に空欄があることを対象者に伝え、この空欄に何をいれるか暫定的な計画でもよいので考えてもらうように促した。

以上のように、田澤（2017）は、将来の目標と現在との間に空白があることを可視化することは、学生が今後の学生生活を考えるきっかけになることを指摘した。

## 4 オンライン授業における写真投影法を用いた教育実践

本節では、オンライン授業における写真投影法を用いた教育実践について、特に、オンライン授業に伴って変更した手続き等に焦点を当てながら報告する。

まず、対面授業における手続きとして田澤(2010)から田澤(2017)までの変遷を確認した後に、オンライン授業における手続きで何が変更されたのか述べる。

以降は、第3節と一部重複する箇所があるが、

手続きの変更箇所を対比させながら紹介することにする。

### (1) 対面授業における手続き

田澤(2010)の手続きを表1に、田澤(2017)の手続きを表2に示す。

#### ①調査時期、使用機材

田澤(2010)においては、調査時期が2005年4月から7月であり、27枚撮りのインスタントカメラを筆者が対象者に配布した。一方で、田澤(2017)においては、調査時期が2012年、2013年、

1. カード一枚一枚に、それが何を示すか(過去or現在or未来)書いてください。
2. 以下の図のように、時系列と重要度の順にカードを配置して下さい。
3. その際に、関連があるカードは可能な限りくっつけて配置して下さい。



図1 配置を説明する図



図2 学生による配置の例

表1 田澤 (2010) の手続き

対象者	福祉系専門学校の3年生 (最終学年) 12名
科目	心理学系の必修科目
調査時期	2005年4月から7月
使用機材	27枚撮りのインスタントカメラを調査者が配布
教示	「あなたが、どのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮って下さい (例えば、自分の大切にしているものや好きだと思うものを撮って下さい)。必ず自分自身で撮影して下さい。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。一日に何枚撮っても構いません。同じものを何枚撮っても構いません。撮った写真の中からいくつかを選んでもらい、後ほど授業でなぜその写真が好きなのか解説していただきます。」
提出方法	撮影したインスタントカメラを調査者が回収
調査者による事前準備	写真現像、CD-R プリントを業者に依頼
授業の進行 (調査者)	発表者が指定する写真番号をもとに、調査者がCD-R から該当する写真を抜き出し、プロジェクターを通してスクリーンに投影
授業の進行 (対象者)	発表者は1人5分以内に自分が選んだ写真が何であるのか説明する。聞き手はそのプレゼンテーションを見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなどのコメントを、コメント・ペーパーに記入する。発表者はそれらのコメント・ペーパーを受け取り、翌週にコメント・リプライ・ペーパーを提出する。

表2 田澤 (2017) の手続き

対象者	大学1年生48名 (各年度では、およそ16名程度)
科目	1年前期の必修科目「基礎ゼミ」
調査時期	2012年、2013年、2014年の4月と7月
使用機材	対象者自身のスマートフォン等を利用
教示	「あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮って下さい。その際に、あなたの過去の過去、現在、未来を表すような写真を撮ってきてください (例えば、高校時代の思い出の品、現在、好きだと思うもの、将来なりたい職業についている人など)。必ず自分自身で撮影して下さい。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。一日に何枚撮っても構いません。同じものを何枚撮っても構いません。」 ※最低9枚 (あなたの過去 = 3枚、あなたの現在 = 3枚、あなたの未来 = 3枚)、最高27枚になるように撮影を依頼。
提出方法	自己紹介用のパワーポイントとして作成してメールにて提出 ※写真をメールで添付する形式も可とした
調査者による事前準備	提出されたパワーポイントファイルを投影用のパソコンにセット
授業の進行 (調査者)	提出されたパワーポイントファイルをプロジェクターを通してスクリーンに投影
授業の進行 (対象者)	発表者は1人5分以内に自分が選んだ写真が何であるのか説明する。聞き手はそのプレゼンテーションを見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなどのコメントを、コメント・ペーパーに記入する。発表者はそれらのコメント・ペーパーを受け取り、翌週にコメント・リプライ・ペーパーを提出する。

2014年の4月と7月であり、対象者は自身のスマートフォン等を利用して撮影した。特に使用機材においては大きな変更があったといえる。

## ②教示

田澤 (2010) における教示は、「あなたが、どのような人間であるか分かるような写真」の撮影を求めており、その具体例として、「自分の大切



にしているもの」および「好きだと思うもの」などを示していた。これは写真投影法という言葉で最初に用いた野田（1988）が「一日の生活と好きなモノ」というテーマで写真を撮ってもらったことなどを参考にしたものである。

しかし、田澤（2010）においては、写真投影法が進路選択に役立たなかったと認識した理由に、就職とは直接関係のないものを写したためというような「進路先と無関連」というカテゴリーが表れており、撮影をする際の教示を改善する必要があった。そこで、徳田・尾崎（2006）、尾崎・徳田（2006）を参考にして、過去・現在・未来という時間的流れの中で、ストーリーとして人生を再構成することを狙うことにした。

その後、田澤（2017）においては、「あなたが、どのような人間であるか分かるような写真」の撮影を求める点では同様であるが、「あなたの過去、現在、未来を表すような写真を撮ってきてください」と教示した。

従来の時間的展望研究には、展望地図法（園田・穴井・津田，2003；園田，2011）や、過去・現在・未来の重要な出来事の結びつきを「見える化」するワーク（半澤，2013）などがある。これらに共通していることは言語を用いて、過去、現在、未来にかかわる事柄について、対象者自身が書き込んでいることである。それに対して、田澤（2017）では、言語化だけではないアプローチとして写真投影法に注目した。

このように教示においては、個人にとっての過去・現在・未来という時間的流れを導入するようになったという経緯がある。

ちなみに、第2節で示したように、写真投影法は、自らが写真撮影することに特徴があるため、厳密には、過去に撮影された写真は含まれない。しかしながら、対象者から問い合わせを受けることもあったため、田澤（2017）においては、過去に撮影された写真を撮影することを認めることにした（例：高校時代の思い出等の写真を接写することなど）。

### ③提出方法、事前準備

田澤（2010）においては、撮影したインスタントカメラを筆者が回収し、写真の現像、CD-Rプリントを業者に依頼した。現像代等はすべて筆者が負担したため、実施する際には、高額なコストが発生する問題があった。

それに対して、田澤（2017）においては、スマートフォン等で撮影する環境が整ったため、コストの問題はなくなった。

## (2) オンライン授業における手続き

上記までには、対面授業であった田澤（2010）から田澤（2017）までの変遷を確認してきた。以降には、田澤（2017）から本稿のオンライン授業までの変遷を確認していく。2020年度にオンライン授業で行った手続きを表3に示す。

### ①対象者、調査時期、使用機材

調査時期は、2020年9月から10月であり、対象者は、筆者の「演習」を受講した大学2年生11名であった。下記の教示をもとに写真の撮影を依頼したのは初回の授業であった。

法政大学においては、2020年7月に秋学期授業実施方針を公表しており、対面授業とオンライン授業を併用すること、および「新型コロナウイルス感染症に対する行動方針」により秋学期授業の実施レベルを判断することになっていた。これに基づいて秋学期授業は、行動方針に定めるレベル3により開始した。これは原則としてオンライン授業を実施するものであった。

オンライン授業では、田澤（2017）と同様に対象者自身のスマートフォン等を利用することにした。

### ②教示

田澤（2017）においては、教示文の本文ではなく、注意書きで撮影枚数について言及していた。この箇所について修正することにした。すなわち、オンライン授業では、「あなたの過去を3枚、あなたの現在を3枚、あなたの未来を3枚として合計

表3 オンライン授業で行った手続き

対象者	大学2年生 11名
科目	2年後期の「演習」
調査時期	2020年9月から10月
使用機材	対象者自身のスマートフォン等を利用
教示	「あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮って下さい。その際に、あなたの過去の過去、現在、未来を表すような写真を撮ってきてください（例えば、高校時代の思い出の品、現在、好きだと思えるもの、将来なりたい職業についている人など）。必ず自分自身で撮影して下さい。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。あなたの過去を3枚、あなたの現在を3枚、あなたの未来を3枚として合計9枚を撮影してください。撮った写真について、後ほど授業でなぜその写真を選んだのか解説していただきます。」
提出方法	Wordまたはパワーポイントに9枚の写真を挿入して、大学の学習管理システム（Learning Management System）にて提出 ※環境の都合などで難しい場合には、写真をメールで添付する形式も可とした
調査者による事前準備	提出されたパワーポイントファイルまたは写真をパソコンにセット
授業の進行（調査者）	提出されたパワーポイントファイルまたは写真をZoom上で画面共有
授業の進行（対象者）	発表者は1人5分以内に自分が選んだ写真が何であるのか説明する。聞き手はそのプレゼンテーションを見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなどをZoom上のチャットに書き込む。発表者はチャットに書かれたコメントを読み、その場でコメント・リプライとして感想を口頭で述べる。翌週までの課題として、大学のOATube（Open Academic Tube）に改めて今回のプレゼンテーション動画を撮影し、この授業の履修者のみ閲覧可能に設定してアップロードする。

9枚を撮影してください」と教示文の中に明記することにした。田澤（2010）および田澤（2017）において、枚数の上限は指定してきたが、枚数の指定をすることは初めてのことであった。

ちなみに、オンライン授業で課題を設けた2020年9月は、感染症の予防や拡大防止が求められる時期でもあった。そのため、撮影のための外出は控えるように指示し、田澤（2017）と同様に、過去に撮影された写真を撮影することを認めることにした。

### ③提出方法

オンライン授業では、課題の提出に、大学の学習管理システム（Learning Management System）を用いた。これは2020年度のオンライン授業では、学習管理システムを用いることが前期のうちに定着していたことによる。

### ④授業の進行方法（調査者）

田澤（2017）では対面授業であったため、プロジェクターを通してスクリーンに投影していたが、2020年度のオンライン授業では、Zoom上で画面共有することになった。この時に筆者が改めて気がついたことは、パワーポイントを必ずしも使用しなくても、パソコンのフォルダの中に、発表で示したい順番の番号でリネームした写真（例：01.jpeg、02.jpeg、03.jpegなど）を用意し、最初の写真（01.jpeg）を画面共有すれば、その後は、右矢印キーなどを押すことにより、写真を順番に提示できることである。このことは、学生のパソコンにパワーポイントがインストールされていなくても、学生自身がZoomで画面を共有して発表が可能であることを意味している。この考え方に基けば、今後、課題の提出方法はパワーポイントを利用せずに、順番に写真を選択して提出する方法も視野に入れることができる。

## ⑤授業の進行方法（対象者）

田澤（2010）および田澤（2017）では、発表者が発表を終えたら、聞き手はコメント・ペーパーに記入をして、そのコメント・ペーパーを授業終了時に発表者が受け取っていた。発表者によるコメント・リプライ・ペーパーは翌週に提出するという流れであった。

それに対して、オンライン授業では、それぞれの聞き手がZoom上のチャットに書き込み、発表者はチャットに書かれたコメントを読み、その場でコメント・リプライとして感想を口頭で述べるという流れであった。すなわち、聞き手はコメント・ペーパーに対するリプライを翌週まで待たずに、その場で聞けるという大きな変化があった。対象者にもよるが、紙に文字を手書きするよりも、Zoom上のチャットのようにWeb上での入力（スマートフォンのフリック入力やパソコンのキーボードによる入力）の方が時間を短縮できるのかもしれない。

このように、従来までは翌週までの課題としていたことが、授業内で実施できるようになったこともあり、オンライン授業では、翌週までの課題を変えることにした。自分以外の発表を聞くことによって、対象者が自分の発表について修正や追加をしたくなることがあると思われる。そこで、大学のOATube（Open Academic Tube）<sup>2)</sup>に改めて今回のプレゼンテーション動画を撮影し、この授業の履修者のみ閲覧可能に設定してアップロードする課題を設けた。他者の影響を受けて、自らの過去・現在・未来を語りなおすという作業になった者もいたと思われる<sup>3)</sup>。

## 5 まとめ

### (1) 本稿のまとめ

本稿では、オンライン授業で実施した写真投影法を用いた授業実践について報告してきた。本稿で紹介してきたような写真投影法を用いた授業実践では、1) 対象者に教示文をもとにして写真の撮影を依頼する、2) 対象者が聞き手に対して

その写真について語る、3) 聞き手は発表者（対象者）に対してコメントする、4) 対象者はこれらのコメントに対してリプライするという流れが最小単位になると思われる。これらの教示文をAppendixに示す。その後、必要があるならば、第3節で紹介してきたような、「写真投影法を用いた時間的展望ワーク」（田澤，2017）などを追加すればよいであろう。

### (2) 実施にあたり

対面授業においては、筆者のパソコンを用いて対象者の写真をスクリーンに投影してきた。それに対して、オンライン授業においては、筆者または写真を撮影した対象者自身のパソコンからZoomの画面共有をした。その際に、写真を撮影した対象者以外の聞き手が、それらの写真に対してアクセス可能な状態にするか否かという点を考えなくてはならない。基本的には発表で用いた写真はその場限りのものという位置づけであった。しかし、オンライン授業において、受講者による録画や録音を技術的に防止することは困難であり、倫理面から受講者にアプローチをする必要がある。この倫理面がクリアできれば、本稿のように授業の履修者のみ閲覧可能な形にしてOATubeに改めて今回のプレゼンテーション動画をアップロードすることが可能であるし、技術的にはOATube上でコメントすることも可能である。

写真投影法は、かつてインスタントカメラを配布する形で実施してきた。通信技術が発達すれば、実施の仕方も変わっていく必要があるであろう。

### 注

- 1) なお、この訳語を適宜改変した白井（2018）によれば、時間的展望の定義は「ある時点に存在する個人の心理的過去および心理的未来についての見解の総体」である。
- 2) 動画を用いた学習を支援するシステム。あらかじめ撮影した映像をアップロードし、配信する



ことができる。公開範囲を「クラス内公開」とすることで、授業の履修者・教員に限定して動画を公開できる。設定を変更すれば、教員だけでなく学生も動画公開が可能である。法政大学においては、2020年9月にOATubeがリニューアルされたことにより、クラスに限定した動画配信が手軽に行えるようになった。

- 3) 授業の発表で用いた写真と OATube で用いた写真にどのような違いがあったか、また、同じ写真であったとしても、説明の仕方等がどのように変化したのかという点は興味深い点ではあるが、今回、本稿の目的はそこにはない。他者の影響を受けて、写真投影法で撮影する写真がどのように変わるのかについては、田澤 (2010) ですでに検討済である。第1回の写真投影法から第2回の写真投影法にかけて、自分の撮影した写真のカテゴリーに変化を認識した対象者は50.0%であった。

#### 引用文献

- Flick, U. 1995 *Qualitative Forschung*. Hamburg: Rowohlt. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 2002 質的研究入門: <人間の科学>のための方法論 春秋社)
- 北川大 2004 「写真」を通して自分と向き合うということ: 映像教育の実践の現場から」『教育』703, p45-52.
- 半澤礼之 2013 「過去と未来を眺めること: 時間的展望」安達智子・下村英雄 (編著) 『キャリア・コンストラクションワークブック: 不確かな時代を生き抜くためのキャリア心理学—』金子書房, pp.67-75.
- クルト・レヴィン 2017 『社会的葛藤の解決と社会科学における場の理論Ⅱ: 社会科学における場の理論』ちとせプレス
- 文部科学省 2020 『大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査』
- 野田正彰 1988 『漂白される子供たち: その眼に映った都市へ』情報センター出版局.
- 大石千歳 2010 「アイデンティティの表現方法としての写真投影法: 撮影内容の個人間比較および3種類の撮影テーマによる個人内比較」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』45, p131-141
- 大石千歳 2012 「若者の自己発見・自己表現としての「持ち寄り写真投影法」: 各撮影テーマにおける多次元のアイデンティティの表現方法の比較検討」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』47, p13-25.
- 尾崎仁美・徳田治子 2006 「ライフストーリーアプローチを用いた女子大学生の自己理解支援の試み (1)」『日本発達心理学会第17回大会発表論文集』p300.
- 白井利明 2018 「クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か: ダイナミック・システムズ・アプローチとしての生活空間論」『大阪教育大学紀要 (総合教育科学)』66, p75-94.
- 園田直子 2011 「時間的展望を形成する方法としての「展望地図法」の開発とその効果の検討」『久留米大学心理学研究』10, p22-30.
- 園田直子・穴井千鶴・津田彰 2003 「首尾一貫感覚からみた育児期女性の自己概念: 自己概念の再構成課題による育児期女性の心理的特徴の分析」『比較文化研究』31, p57-72.
- 高野由美子 2000 「大学の授業における環境教育的試み (2): 「写真投影法」を用いた授業実践から」『家庭科教育』74, p44-50.
- 田澤実 2010 「写真投影法を用いた自己理解教育の試み」『法政大学情報メディア教育研究センター研究報告』23, p119-126.
- 田澤実 2017 「写真投影法を活用した時間的展望の実態把握と働きかけ—大学1年生を対象にして—」『キャリアデザイン研究』13, p163-168.
- 徳田治子・尾崎仁美 2006 「ライフストーリーアプローチを用いた女子大学生の自己理解支援の試み (2)」『日本発達心理学会第17回大会発表論文集』p301
- 都筑学 2005 「写真投影法による青少年の内面把握の試み」『教育学論集 (中央大学)』47, p223-249.

## Appendix

### ■写真投影法の教示文

あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮ってください。その際に、あなたの過去、現在、未来を表すような写真を撮ってきてください（例えば、高校時代の思い出の品、現在、好きだと思えるもの、将来なりたい職業についている人など）。必ず自分自身で撮影してください。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。あなたの過去を3枚、あなたの現在を3枚、あなたの未来を3枚として合計9枚を撮影してください。撮った写真について、後ほど授業でなぜその写真を選んだのか解説していただきます。

### ■コメント・ペーパーの教示文

( ) さんに対するコメント

※写真を見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなど

### ■コメント・リプライ・ペーパーの教示文

あなたの発表に対してコメントが寄せられました。それぞれのコメントを読んで、改めて感じたこと、分かったこと、コメントに対する返事、感想などを書いてください。

# Online University Classes Using Visitor Employed Photography

TAZAWA Minoru

---

Most university educational practices were based on face-to-face classes. However, in 2020, university education became increasingly dependent on online classes. In the future, it would be necessary to demonstrate how current educational practices can be introduced into online classes. In this paper, we have first presented an overview of

educational practices using Visitor Employed Photography implemented by the author in face-to-face classes. Next, we have pointed out the need to change teaching methods and methods of conducting classes using Visitor Employed Photography in online classes. Finally, data handling in online classes is discussed from the perspective of ethics.